

第28期社会教育委員の会議

第2回定例会

議事録

平成30年8月22日

【1】 開催日時

平成30年8月22日（水）18時30分～20時15分

【2】 開催場所

世田谷区役所第2庁舎3階 教育委員会室

【3】 出席委員

萩原委員（議長）、神保委員、森岡委員

村上委員、権田委員、山崎委員、吉岡委員、湯澤委員

【4】 出席職員

教育委員会事務局

花房生涯学習部長、田村生涯学習・地域学校連携課長

大井社会教育係課長補佐、御園生社会教育担当係長、橋本社会教育係主任

【5】 傍聴人

無し

【6】 次第

1 前回議事録の承認

2 意見交換

（1）テーマ設定の方向性に対する活動内容の検討

①前回の振り返り

②今期テーマの方向性をめぐる意見交換

－具体的設定に向けて－

③活動スケジュール（案）について

（2）その他

①事業報告

「第41回ふるさと区民まつり」開催結果

「第21回アドベンチャー in 多摩川いかだ下り大会」

○議長 では、第28期社会教育委員の会議第2回定例会を始めさせていただきたいと思
います。

開催に先立ちまして、本日、坂倉委員が御都合により欠席の連絡をいただいております
ことを御報告いたします。本日、傍聴人は。

○事務局 ございません。

○議長 いらっしゃらないということです。

では、本日の議事日程に沿って進めさせていただきたいと思えます。皆様のお手元に議
事日程は配られているでしょうか。まずは、前回の議事録の承認です。あらかじめ委員
の皆様には議事録（案）が送られたかと思えます。それぞれ事前に訂正が入ったところは
訂正されて、修正済みということになりますが、何か訂正、修正はございますか。

（ なし ）

○議長 では、御承認をお願いいたします。この会議終了後に峯岸委員と神保委員に署名
をいただきたいと思えますので、よろしくお願ひします。峯岸委員がいらっしゃったら、
またお伝えしたいと思えます。

今回の議事録の署名につきましては、森岡委員と村上委員をお願いしたいと思えます。

では次に、前回、第28期のテーマ設定について、事務局から提案がありました。第27期
の社会教育委員の会議で行われていた子どもの貧困問題への社会教育からのアプローチに
ついての説明があった上で、今期については、前期からのテーマを引き継いで、それを具
体的な方策に落とし込むという方向性で議論いただけないかというのが事務局案として提
示されたわけです。前回は、補助金関係もありまして、十分な時間をとれなかったので、
まずは前期の活動報告書の内容を大まかに御説明した上で、皆様からの自由な御感想、コ
メントをいただいたというあたりでとどまっておりました。今日は、もう少し踏み込んで、
主にこの活動報告書に根差しながら、皆様と意見交換をできればと思っています。そして、
その後の活動スケジュールについても、できればある程度見通しを立てたほうがいいので
はないかということで、事務局からも相談が来ております。

大まかな今日の流れとしては、そのような形で進めようかと思えますけれども、よろし
いでしょうか。

（ 異議なし ）

○議長 では、前回の振り返りに移りたいと思えます。会議資料2は、前回、皆様からい
ただいた御意見を議事録から抜粋したものです。事務局から、簡単に説明していただい

もよろしいですか。

○事務局 前回、第1回の意見交換の中から抜粋をさせていただきました。1つ目は、関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策について、2つ目が、困難を抱える子どもの特徴と対応について、そして3つ目には、子どもの貧困と関係性の貧困について御意見が交わされたということもありまして、大きくこの3つのテーマでくくらせていただいたということです。

○議長 この資料の構成については、大きく四角で囲って、3つにグループ分けされていますけれども、左の上半分は、前期の報告書で最終的に提案された中長期的な展望として、こういう方向性、ビジョンを持ったらいいのではないかとということが最初に掲げられているわけです。「関係性の貧困からの脱却に向けた方向性と方策」ということで、大きなビジョンとしては、「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」について、展望を持って検討するべきではないかという提言をしたわけです。そのためには、当事者を共の世界——これは共助と言ってもいいのかもしれませんが、共助の世界、インフォーマルなつながりの世界や、公へつなぐ、公助の世界、公的なサービス、制度へつないでいくということが必要だろうと。そのために、「インフォーマルな『共の世界』を豊かにする」、「『共の世界』を育むプラットフォームをつくる」、「第三の大人のネットワークをつくる」の3つの柱が前期の報告書では示されたということです。それについて、皆様からの御意見と、これは事務局からの説明や私からの説明もちよっと入れ込んであるような形かと思います。

次に、「困難を抱える子どもの特徴と対応」ということで、これは、今期の委員の皆様それぞれのお立場から、ふだん見えている、感じ取っている子どもの様子、あるいは家庭の様子の御意見をまとめています。困難を抱える子どもはどういう特徴があるだろうかということでも出てきたものをここにまとめているわけです。例えば「子どもの貧困や関係性の貧困も含め、学校ではなかなか見えないが、BOPでは親の様子や子どもの様子が見えることはあるのか」、「学校ではおとなしい、家へ帰ってもおとなしいが、学童クラブの特にひとり親家庭の子どもの場合、BOP、学童に来ると暴れるというケースがあった。親に対して気を遣い関係性の貧困との関係があるのでは」、あるいは、「子どものプライドは大人以上に高いので、仲間がいるなかで比較的自分が困難だというSOSは出さないことが多く、こども食堂の帰り道で本音を出すことがあるため、聞き逃さないようにしている」というお話もありました。主に放課後の子どもたちの様子をめぐって御発言いただい

ます。

今後の方策にも結びつくかもしれませんが、例えば「BOPや学童、児童館という場所は、何かしらの状況をつかむ場所になり得ると思うし、そういう場所でこども食堂や学習支援などが行われればつながっていくことにもなるのではないか」という御意見もありました。あと、子どもが抱えている困難さ、生きづらさみたいなものとして、「暴れている子どもなど、大人から思うと不適切な、とても扱いにくい状況を出す子どもというのは、心のどこかにうまく吐き出せない苦しさをもっていることがある」、「最近、両親とも忙しい家庭が増え、持ち物や何かにつけ、昔では考えられないようなケースも見受けられる。基本的な家庭教育の部分ででききれていないことがあると思う」、「困難な家庭に気づくと、子どもは微弱なサインを学校だけではなく、いろいろなところで出しているというのが見えてきた」、「子どもは自分の置かれている状況が困難かどうかは、ほかの家庭を知らないので、特に関係性の少ない子どもほど自分が大変な状況とは理解していない」。当事者自身も、自分がそういう困難さを抱えていることそのものに気づかないという御意見をいただきました。

右半分は「子どもの貧困と関係性の貧困」をめぐって、事務局でまとめていただきました。貧困というと、一般には経済的貧困のほうが言われるというか、そう理解されてしまうところがあるわけですが、ここでは、もちろん経済的な貧困も重要な要因ではありますが、それと相まって、やっぱり関係性の貧困ということを社会教育委員の会議では重視してきたわけです。そのことをめぐっての皆様御意見であるとか説明について、少しおさらいしたいと思います。

例えば『『貧困』という言葉にすごく抵抗を感じてしまうが、少数派の子どもたちをどうやって救うかという話か、精神的な部分でその育ちを孤立させない、家庭を孤立させないで地域全体でという話か悩んでいる」という御指摘、あるいは、講師の事例——前期の事例研究の際、児童館の元館長さんのお話の事例では、経済的貧困の若者が児童館とつながりながら前向きに生きているケースがあり、何がそうさせるのかといえば、関係の豊かさではないかということです。「経済的に何でも買い与える家庭で、関係性の薄い子どもは自己主張のために大きな声でその場を収めるということが見られるため、経済的よりも関係性のほうが重要ではないかと思う」という御指摘もいただきました。

あと、「経済的貧困と関係性の貧困は相乗効果があると捉え、この2つは別物ではなく絡み合っていると捉えている」。ちなみに、経済的貧困に陥った場合、どういうことが起こる

かという、これは前期の事例研究の中でも出てきたわけですが、修学旅行に参加できないとか、いろんな放課後のプログラムで、お金がかかるときに参加できない。つまり、機会の選択が奪われることがあるといいます。そうなってくると、当然、そこで得られる体験、人間関係、そういった関係性にまで及ぶということがあるわけです。そのように経済的な貧困と関係性の貧困は相互に絡み合っているという理解になるわけです。

戦後の日本、焼け野原のときにだって、経済的にみんな貧困だったじゃないかということがよく言われるわけですが、これについては、民俗学者の柳田国男さんが、かつては共同貧だったという指摘をしています。お互いに、皆がある意味平等に経済的貧困、貧しかったという、共同の貧困。皆さんが貧困であるということを共有し合っている状況にあったのが、戦後の日本が高度経済成長に向かっていくときの貧困状態。今は、物質的にはかなり豊かになった。豊かになったということは、その中で1人、例えばクラスの中で、地域の中で1人、経済的貧困に落ち込むとどうなるかということ、そこに非常に差が生まれる。周りと違う。あれ、何であの子はこうなのという、逆にラベリングが生じやすくなるということです。全体として同じ水準で経済的に貧しい場合は、そういう差異が生まれにくいわけですが、今の子どもたちが置かれた経済的な貧困の状況というのは、かつての経済的な貧困と何が違うかということ、そこには自尊感情が傷つけられるおそれが生じやすい、レッテル張りが生まれやすいということが1つ、挙げられるわけです。ですから、親御さんもそういうふうに見られないように、何とか周囲に対しては、普通であろうとする、一生懸命見せないように振る舞おうとするという指摘もあるようです。なので、貧困が見えにくいとも言われているそうです。経済的貧困ということも1つとっても、今の経済的には成熟したこの社会、日本における経済的貧困と、高度経済成長期以前の経済的貧困とでは、質的にそれだけの違いがあるという指摘もあります。

あと、貧困の客観的なデータについても、当然、皆様のほうでは気になるころだったと思いますが、世田谷区の生活実態調査、貧困も含めた基本調査はこれからということで、今進めているところですよ。国のほうで言うと、13.9%が相対的貧困と出ているそうです。一時期の6人に1人が貧困と言われていたときより少しポイントが減って、今は7人に1人とも言われています。ただ、ひとり親家庭の場合、相対的貧困のパーセントというのは、いまだ50%を超えています。これはOECDの加盟国の中では、やはり最も低い、よくない状況というか、日本はその中では相対的貧困率が高い、特にひとり親家庭はそうなるというデータが出ています。

事務局から参考資料1と参考資料2について説明していただけますでしょうか。

○事務局 会議資料2にもありますとおり、1つの方向性と3つの方策を出していただきましたので、教育委員会としては、具体的な施策につながるようなご意見をぜひ今期出していただきたいということで、お話をさせていただきました。

子どもの貧困というと、どうしても経済的貧困というところに目が行きがちで、他の自治体に関しても、今、そういう施策が広がっております。世田谷区においても、経済的な支援、あるいは学習支援等々もありますが、今回は、関係性の貧困ということになりますので、それを御理解いただくために、いろいろ調べた結果、首都大学東京子ども・若者貧困研究センターが東京都受託事業「子供の生活実態調査」の詳細分析の報告書の抜粋を参考資料としてお付けしました。詳細分析の趣旨は、こちらに書いてあるとおりですが、調査対象は、都内の墨田区、豊島区の2区と、調布市、日野市の2市に在住の小学5年生、中学2年生、16、17歳の子ども本人とその保護者、約2万世帯から調査をとっています。

第1章では、子供の困難に立ち向かう力ということで、まさに自助の部分をやっています。「はじめに」の下の網かけ部分、「子供が生活困難に陥っても逆境を跳ね除け、困難に立ち向かう力を持てるようにするには、どのようにすればよいのか」は、まさに今回の「どんな状況にあっても生きづらさを感じず前向きに生きていくための環境のあり方」に通じるものがありましたので、抜粋をさせていただきます。

「分析の目的」では、困難に立ち向かう力——学術的にはレジリエンスと呼ばれるわけですが——は、自尊心（自己肯定感）、頑強性や自己効力感とかかわりがあるとされているということで、下の網かけしている部分、「自己肯定感が高い子供は、レジリエンスが高く、たとえ生活上の困難に陥っても、それを跳ね除け、その状況から抜け出すことができる」と言われています。

また、困難に立ち向かう力は自助ということになりますが、「周囲の人との会話の頻度」の関係では、人との関わりの中で、会話の頻度が高ければ高いほど、仮に経済的に生活困難層であっても、自己肯定感が高いというパーセンテージが資料の右側に出ています。それは、親とだったり、友人とだったり、学校であったり、その他、第三の大人と言ってもいいと思いますが、子どもたちへのアンケート調査の中でも、「よく話す」、「時々話す」という方のほうが自己肯定感が高いというデータが出てきています。

ということで、「支援の方向性」としては、「自己肯定感と様々な子供の状況との相関を

見たのみであり、子どもの状況と自己肯定感の因果関係を立証するものではない点に留意しなくてはならないが」となっていますが、ただ、「どのような子供が生活困難な中であっても自己肯定感が高い（＝低くならない）のかの手がかりを得ることができた。まず、重要なのは、人とのつながりである」ということです。ですから、今回、これから議論していただく関係性の貧困というところでは、特に人とのつながりの中で、こういうデータも含めて、参考になるのではないかというのが1点です。

それからもう1つ、公益財団法人東京市町村自治調査会より、基礎自治体における子どもの貧困対策に関する調査研究報告書が出されています。

1に関しては、「子どもの貧困の背景・現状およびその影響」ということで、これは一般的に言われていることを抜粋しております。貧困の定義、子どもの貧困率、先ほどもお話がありましたけれども、最新の調査では13.9%ということで、17歳以下の子どものうち、7人に1人が相対的貧困の状態です。それから、ひとり親に限って見ると、相対的貧困は50.8%ということで、5割を超えており、2人に1人ということになります。それから、子どもの貧困の社会的背景であるとか、子どもの貧困の現状が書かれています。

特に④子どもの貧困の現状で、子どもの貧困の見えにくさは、先ほども議長からお話ありましたが、こちらの記載文の下から3行目、「特に昨今は最低限の生活内容も多様化(衣食住よりも携帯電話等の通信費を優先する等)し、一見すると周囲からは標準的な暮らしぶりで見分けがつかない」ということで、こういう背景があって、見えにくいのではないかとということも書かれています。

右のところで行きますと、上から3つ目、子どもの貧困の深刻化・連鎖では、「子どもの貧困は、『経済面の課題』にとどまる問題ではない。経済的な困窮は、『家庭・人間関係、精神面の課題』」ということで、まさに関係性の貧困に当たるところではないかと思いますが、それだけではなくて、『生活面の課題』、『教育面の課題』をも引き起こす」ということで、これが進んでいくと、こうした経済的困窮がもたらした多面的、複合的な課題になっていく。だからこそ、貧困の深刻化につながる恐れがあり、その家庭に生まれた子どもは貧困の連鎖をもたらすという悪循環が生じる、とされています。

また、「2子どもの貧困対策」の①子どもの貧困対策を推進する上での観点というところでは、子ども達の成長を支えるための共助・公助の取り組みの必要性がうたわれていますけれども、ここでは、自助、共助、公助。今回、28期では、共助という言葉ではなくて、共の世界とうたっています。それは、先ほど議長からも、共助と置きかえてもいいのでは

ないかというお話がありましたけれども、まずは自助のところ、「困難な状況に直面した時に、それらを対処していくのは、最終的には子ども達自身である」と。前期、27期でも、子どもたち自身にそういう力をつけさせたほうがいいのではないかという御意見が出ていましたが、まさにそういうところにも通じているのかなと思っています。

ただし、共助の部分で、「子ども達の力や自信は、他者との関係性やつながりの中で育まれる。支援制度をいくら設けても、それだけでは難しい。そこで、地域の大人たちによる支援が効果的である」と、まさに共の世界のことをうたっています。「地域の大人たちが自分に向き合ってくれることで安心感を取り戻し、地域の大人達との関わりの中で育まれる小さな成功体験や自己肯定感の積み重ねが子ども達の自信につながっていく。また、地域の大人達との何気ない会話の中で日常生活に必要なことも身についていくものである」。まさにインフォーマルな共の世界をどうつくっていくのか、そういう中で、子どもたちが困難をはねのける力を養っていくんだということがうたわれているかと思います。「また、子どもだけではなく、保護者にとっても地域からの支援は重要である」とうたわれていますので、このような報告書をもとに、今回の議論の参考になればということで、参考資料としてつけさせていただきます。

○議長 今の資料の最後のほう、2、子どもの貧困対策、①子どもの貧困対策を推進する上での観点、自助、共助、公助のあたりは、割と前期の報告書で示した方向性と重なる部分が多いです。前期で示した、どんな状況にあっても、前向きに生きていけるとするのは、子ども自身がそういう力を持って生きていってほしいというのが前提にあるわけです。そういう力を育ていけるような環境づくりは公助の部分ですから、共助、公助でやらなければいけない、我々のほうで、大人の側でそこは考えなければいけないということで、かなり重なっているかなと思います。

そのような補足の説明をいただいて、前回、少し消化不良だった部分、特に貧困とは何だろうかという疑問も出ました。貧困というよりも、社会的孤立であるとか、精神的な貧困ではないのかという御指摘も受けましたが、この貧困という言葉について、社会福祉辞典で貧困という言葉はどういうふうに定義しているかというのを参考までに。社会福祉の領域では、貧困という用語は、人々の生活における何らかの受け入れがたい欠乏を意味するというふうに使われているそうです。つまり、標準的な暮らし、あるいは、最低限これは人間らしく生きていくためには必要な水準というのがあって、それが受け入れがたいぐらいに欠乏している領域に達したときに貧困と、福祉の領域では使っているようです。当

然、経済的貧困といったら、本当に最低の賃金もない、収入もないという状況が私たちは容易に想像できますが、関係性の貧困となると、にわかに理解しにくいわけです。これは、先ほどのような体験、ほかの子どもたちだったら、当然、友達と放課後遊んだりする時間がある、人間関係がある、あるいは、少しお金がかかる場所でも、どこかに遊びに行ける。先ほどのような学校行事、特に宿泊を伴うような、ある程度家庭でも負担しなければいけないような学校行事も、当然、ほかの子だったら参加できるわけですがけれども、関係性の貧困となれば、最低でも人間らしく、子どもらしく生活できる機会が奪われてしまうという理解になるのではないかと思います。

となると、「社会的孤立」と「関係性の貧困」という言葉を並べたときに、少しニュアンスが変わってくるかもしれません。社会的孤立というのは、孤立した状態のことを言うわけですがけれども、そこには受け入れがたい欠乏という意味まで含むかどうかというところが問題になってくるかもしれません。そこに逆に貧困という言葉を当てることによって、事のより本質的な意味をあぶり出すということにもなるのかなと。

前回、御指摘いただいたところで、少し私のほうでいろいろと調べていて、見えてきたところを補足させていただきました。テーマ設定の方向性について、今回はなるべく具体的なテーマを設定して、今日である程度形にできたらいいかなとは思っていますが、今期の事務局提案をめぐって、こういう方向で行ったらいいのではないかと、当然、子どもの貧困というテーマだけではない、もっと違った角度からアプローチするべきテーマがあるという御提案があってもいいかと思いますけれども、時間をとりたいと思いますので、改めて皆様からの御意見をいただきたいと思います。

○委員 自助、共助、公助というお話があって、自助の分野は、どちらかというと教育で何とかなるかなと。公助の場合には、行政の力がかなり大きくなるのかなと。やっぱり我々がこれから議論しなければいけないのは——もちろんずっと今までそういう議論をしてきたと思いますが、共助のところはどうやっていくかということだと思います。

議長から、関係性の貧困と社会的孤立はニュアンスが違ってくるというお話があったのですが、なるほどと思って聞いていました。というのは、関係性の貧困というと、当事者としては、社会的につながりたいけれども、どうしていいかわからない。もう一方で、社会的孤立というのは、むしろつながりたくない、つながろうとしないという面を持っているのではないかと。貧困の中で分けると、当事者にとっては、2つの主観的な思いがあるのかな、今、そういうふうにも感じて、そういうくくりの中で、その当事者をどう捉えて、

どう対処していくかということは、切り込む1つではないかなという気がしていました。

○委員 我々ができることは、子どもの貧困対策でいうところの共助の部分だと思います。公助というのは行政の力ということですが、1つは、行政が仮にやる気があったとしても、どこにその力を発揮するのかわからない、意外と就学援助等を含めても——高齢者を抱えていても、資格はあっても、あなたは資格を持っていますよと行政の側は言ってくれない。こっちは待っていても、あなたはこういう資格があるから、申請も含めて来なさいよと言ってくれることもないので、こちらがアクションを起こして初めていろんなことを手厚くやってくれるようなニュアンスをすごく感じます。数少ない職員の中で手分けしてやるということが難しいのであれば、やっぱり地域の大人たちが共助ということで橋渡しをしていく。

子どもの貧困対策ということで、地域の活動や資源を対策につなげていくためのコーディネーター役を基礎自治体が担うようなニュアンスで書いてありますが、自治体は担えないと思っていて、それは共助で、地域の大人たちがどういうふうに組織をしていくのかは議論していかなければいけないですが、自助の部分は学校でといっても、学校の先生も御自身の御家庭があり、通ってくるということで行くと、地域に根差している我々が、先生、こういうことが起きていますよということも伝えていかなければいけないし、例えば児童館の職員からの情報も伝えていかなければいけない。それから、行政の側にも、あの人たち、必要なんじゃないですかということをアプローチしていかなければいけない。共助といっても、極端なことを言うと、例えばあなたは生活保護が必要ですよと赤の他人に言われると、幾らこっちは熱心にやったとしても、いや、ちょっと待てよとなるけれども、行政の側がどうですかと言ったほうが、あっ、そうだなと思ってもらえるのではないのかなと。でも、その橋渡しは、やっぱり地域にいる人たちが手をとり合ってやっていくことが必要なのではないかなと感じたところではあります。

○委員 行政と民間ができることはそれぞれあって、行政からアプローチされたほうがいい方と、たまたま子ども食堂で、行政アプローチはノーだったのに、来てくれて、いろいろな事情があるお話を聞きながら、気持ちが解けてつながるということもありました。もちろん1つとして同じケースがないので、そこはきめ細かく、いろいろな信頼できるネットワークとかが構築されていくことが大事かなと思っています。そして、切れ目なく、息長くできるのは、やっぱり地域の人たちだし、それも、誰かというよりも、そこに張りめぐらされているネットワークなのかなと思ったときに、信頼できるネットワークをどうつ

くっていくのか。例えば子ども食堂でも、いろんな子ども食堂があつて、それぞれ皆さん、趣旨が違ったり、活動の仕方も違ったりする中で、それをどううまく張りめぐらせていくのかなというのをすごく感じているところです。

○委員 子ども食堂で声をかけるときは、子ども同士や、その子どもの親つながりも必要ですけれども、常日ごろ、子どもたちを見ている職員は仲よくなっていますから、その人に、今度やるから来てみない？と言われると、それは保護者もそうですけれども、ちょっと行ってみようかなと。誰がいるかわからない状態で行くよりは、職員の誰か知っている人に、声をかけられたから、行ってみようかなというのが最初のきっかけになったということもあるので、その辺は、行政職ということに関しては、安心感があるのかなという気はしています。

○委員 移動教室ですとか修学旅行につきましては、基準以下の収入の場合には、世田谷区は、きちんと行けるように、学用品も含めて、手厚くやったださっていると思いますので、行きたいけれども行けないというお子さんはいないと感じています。ただ、川場村は、原発事故のときには、あえて行かないという選択をした御家庭も大変多かったので、そういう意味では、行かれないではなくて、行かない。

社会的孤立という部分で、小学生なんかは本当に一緒に楽しくやるというのがいいと思いますが、思春期の中高生ぐらいになりますと、みずから関係性を余り求めていないお子さんも多いのかなという部分では、気になるところではあるので、そういった人たちが、いざというときに、どうしていいかわからないというようなことが起こってきたりもするのかなと感じています。

○議長 世田谷区の場合、貧困の指標を定めて調査はしていないということで、学用品の補助であるとか、そういったものを受給している世帯がどれぐらいというパーセントは、たしか前期に出していただきましたよね。

○議長 確かに制度ではそうですけれども、必ずしもそれを申請するとも限らないという実態もありますし、修学旅行に行けたとしても、ちょっとしたお小遣いや持ち物に差異が出ていて、子どももやっぱり我慢する、そこは辛抱するということがケースによっては出ているみたいです。そこは見えにくいところかと思います。1つ1つ丁寧に読み解いていく必要もあるとは思いますが。

○委員 先日、児童館のキャンプがあつて、その帰りの子どもたちの様子を見ていたら、大きなリュックをしょって、前にもナップザックを持って、手にも何かを提げて帰ってく

る子と、こんな小さなナップザック 1 個で帰ってくる子がいて、私も、どんなものを指示されて、そのキャンプに参加するよというリストがあったかはわからないですけども、同じキャンプなのに、持ち物に物すごく差があるというのに驚きました。ただ、逆に言うと、どんな持ち物でも参加しようという、不備でも行っちゃおうという子もいるという意味で言えば、子どもの行きたいという気持ちで押し出して参加するということで、彼はいろいろな経験や機会を得たのだから、それはそれでいいのだとは思いますが、そういうことを 1 つ見ても、家庭の様子がかいま見えてくるかなということもあります。

そこで何かするというよりは、そういうことを地域みんなが気にとめることが大事なのではないかなと思ったりはしています。そして、気になったことをいい意味で共有する。うわさとか、どうなのというのではなく、温かく見守るということが、地域の人も育てるというか、偏見の目を持たないといいますか……。

○委員 今の荷物の多い少ないというのが貧富の差につながるのかというと、そうではないですね。やっぱり価値観の差というのが出てきて、衣食住より携帯電話を優先するとか、ベンツに乗っていても都営住宅にいたりとか、価値観の差もあるわけです。それをどう見きわめるかというのは、とても難しいです。その辺は地域の人でなければ、行政はわからないだろうし、その辺が難しいなと思いますね。

歴史的に日本というのは、どっちかというとお上がやってくれるものだという意識が結構あります。今、「健康で文化的な最低限度の生活」というドラマがやっていますけれども、憲法で保障された生存権があるから、当然、生活保護は受けるべきだとか、お上がやってくれるということがずっと意識にあります。今、子ども食堂というのが出てきて、これを非常に評価したいと思っています。なぜかという、地域力で食を通じて共助が始まったわけですね。これを少なくとも行政が始めたという話を聞かないですね。補助金はあるのでしょけれども、イニシアチブをとったのは、地域です。だから、これは非常にすばらしい取り組みだなと思う反面、食を通じてでなければだめなのかなという疑問もあります。ほかにもっとあるのではないかなという希望を含めて。もちろん食というのは、とても大事なことでしょけれども、別なアプローチの仕方もあるのかな、それを探る必要があるかなということも考えながら……。

例えば総合型地域スポーツ・文化クラブというのが世田谷では 8 つぐらいあるかな。あれも結局地域力で地域のコミュニティーをつくろうという、1 つの力だと思います。行政がやるのではなくて、地域から芽生えたものというのはとても大事にしていかなければ

いけないかなと思う半面、食だけじゃなくて、いろんなアプローチの仕方がある、それがこれからの議論かと思います。

○議長 全国に子ども食堂が広がるきっかけをつくった方の一人に、豊島区でされている栗林さんという方がいらっしゃいますけれども、もともと豊島区でプレーパークをされていて、遊び場づくりの中で、おなかがすいているけれども、家に帰っても食べるものなんてないということから、じゃ、うちで御飯をみんなで食べない？という流れで生まれたという話も伺っております。それと、プレーパークに来る子たちの中で、高校受験しようと思っているけれども、勉強がわからないという言葉があって、それを拾って学習支援が生まれたということを知っています。なので、子ども食堂プラス学習支援をやっているなど、複合的に取り組まれているところも幾つかあるようです。

○委員 6月4日と5日の朝日新聞に栗林さんが出ていました。食堂で困ったなという相談を受けたり、いろいろつなげているという記事が出ていました。全国で2000ぐらいあると書いてありました。

○議長 どうもその辺のところは、子ども食堂が何か子どもの貧困とニアリーイコール的に社会的には捉えられがちなどころもあるかもしれませんが、多様な取り組みが一方では広がっているようです。

○委員 関係性の貧困が自己肯定感に関係するというところで、ここ最近、自己肯定感が低いと叫ばれているところを鑑みると、人間の関係性が低いというのも理由の1つなのかなと考えたところと、参考資料1で、小学校5年生と中学校2年生の自己肯定感のいろんなデータがありますが、私は、友人との会話というのは、中学生が一番多いのかなと思っていたら、ここでは数字がすごく低い。それを考えた場合に、小学生は意外と恥ずかしさとかそういうのもなく、低学年は特にそうですけれども、年齢が上がっていくと、意外と比べたりするというところで、話をするのも嫌になってしまうというデータなのかなと、ここにすごく危機感を感じています。私は昔の人なので、中学生というのは、友達といるのが一番で、親から何を言われても、友達と一緒にいるというような生活をしていたと思うのですけれども、これを見ると、友人と話すよりも、親と話すほうが自己肯定感が高いということが不思議だな、中学生がちょっと迷っているのかなと思ってしまって、中学生にアプローチというの必要なのかなとすごく思いました。

○事務局 この資料は抜粋ということで、いろんな説明が抜かされているところもあろうかと思いますが、さっきも言ったように、小5、中2、16、17歳の子どもたちからとった

中でも、生活困難層という中で、「よく話す」、「時々話す」人と「あまり話さない」、「ぜんぜん話さない」ということなので、そういうことから考えると、全体の中学生というわけではなく、生活困難層ということになると、まだ親とは話すかもしれないけれども、なかなか友達とは話せないというのがもしかしたらあるのではないかなということで、数字的には低いのではないかとも思えるのですが。

○議長 ここはあくまで生活困難層に特化しているので、一般の中学生や高校生ぐらいの年代のパーセントかどうかは、わからない部分もありますけれども。

○委員 そうなってしまうと、とても寂しいかなと。そういうところにいる子たちは、お友達にも話せない状態、線を引いてしまったりしているかなとか、思っていました。

○委員 生活困難層というのは、その世帯が生活困難という解釈ですか。どういう基準ですか。

○事務局 この報告書ではそこまで具体的な基準は出していません。

○委員 イメージが、生活困難層というのは、どこをもって生活困難層と分けられているのかが、私には……。どのぐらいのレベルのところまで線引きがされているのかしらというところの話ですけども、もしおわかりになるようでしたら。

○事務局 大きく分けると、一般層と生活困難層の2つに分けてあるそうです。生活困難層でも、周辺層と困窮層の2つにまた分かれているということです。その分け方は、幾つかの要素があって、いずれか1つの要素に該当するのが周辺層、2つ以上の要素に該当するのが困窮層ということです。

○委員 話がずれてしまい、申しわけないですけども、それは自己申告的な部分ですか。

○事務局 そうです。アンケート調査からということになります。

○委員 小5とか中2というのは、その子どもがアンケートに答えているということですか。

○事務局 そうです。

○委員 わかりました。ありがとうございます。

○議長 1つ、この調査結果で、今意見がありました、中学生になると、なぜこんなに友達との会話の頻度が低くなって、自己肯定感が高い子が減るのかということで、推測するに、小学校のころは、周りとの差異をまだそんなに気にしない、中学校になると、だんだん自意識も芽生えてきますし、周りとの違いというものも、家庭の状況というのもだんだん見えてくる、自分の立ち位置が見えてくるということは、あるのかもしれないですね。

○委員 お友達よりも、その他の大人によく話すとなっているから、やっぱりここら辺の大人を担うのが地域の大人なのかなというところで考えていくのもいいのかなと思います。

○委員 自助と共助と公助のところ、ドイツでは、自発性と参画ということをしごく言っていて、自発というのは、自分で発信する。だから、自分でとにかく助けてくださいと言った人は助けるけれども、言ってこない人は、その人の意思がないものとして、わざわざ助けに行かない。参画というのは、企画、イベントをするときに、お祭りに来てくださるのではなく、一緒に企画の段階から組み立てていく。特に子どもとか学生さんを巻き込んでやっていくということを聞きかじっていて、日本はそれとはまた違うと思うけれども、一緒につくり上げていくとか、やっていくと、子どもたちもしごく生き生きしてくるし、何でも準備しています、はい、どうぞとか、こういうのがありますから来てくださいというよりは、そういうアプローチの仕方もあるのではないかなと思いました。

○議長 昨日、板橋区でも子どもの居場所づくり活動フォーラムというのがありまして、福島で子ども食堂をされている方が基調講演をされていたけれども、おっしゃっていることは全く同じでした。準備し過ぎないほうがいいですよ。余りつくり込んで、用意されたところに子どもたちに来なさいと言っても、子どもは多分、枠をつくられてしまうと、つまらなくて来ない。やっぱり余り準備し過ぎないで、一緒にとということ。まず、立ち上げたい方に言いたいことはそのこととおっしゃっていました。

○委員 イベントをするにしても、その観点はとても大事ですよ。

○議長 あと、幾つか区内で子ども食堂や子ども支援をされている方々が共通しておっしゃっていたのは、子どもがかわいそうだから、支援を受ける側にさせてしまうのは、子どもにとってはつらいこと。やってもらっている、何も返すことができない自分という思いが募ってしまうので、そもそも、こっち側はサポーター、こっち側は当事者みたいな分け方を私たちはしませんと、皆さん、口をそろえておっしゃっていて、なので、みんなメイツと言ってみたり、メンバーと言ってみたり、場に対して、参加する人たちのお互いの呼び方に対しても、しごく気を使っているとおっしゃっていました。子どもたちを被支援者にしない。

○委員 役があると、しごく喜びますし、近くに児童館があるので、伝書バト——児童館の館長さんからの伝言を持ってきて、私に伝えて、次は返すみたいな橋渡しをしながら、児童館から、食堂につながってということもあり、ちょっとした大人の工夫でいろいろで

きるので、知恵の絞りどころはたくさんあるのかなと思います。そういった意味では、中学生もできることがたくさんあるので、一緒に何かを、その子が得意なことをメインに世界を広げてあげるとか、地域だとできるのかなと思います。

北九州で行政が子ども食堂をやっている話は前回しましたか。

○議長 いえ。

○委員 そこは行政がやるので、名簿管理から手洗いから何から、とてもがっちりとしてしまうので、多様性とか自発性という意味では、すごくそがれるところも出てしまう。ただ、逆に安心とか、いい面もあるのですが、いろいろ考えさせられるところがあります。

○議長 仮にここでの施策として、行政として、公助として子ども食堂をつくるべきというようなことをしてしまうと、どうしてもいろいろ制約が生じてしまう可能性は出てきますよね。枠ができてしまう。

今、多様性ということもおっしゃっていただいたので、それも1つのキーワードかもしれませぬ。

共の世界というのは、ある意味、多様性によって成り立っているわけですから、だからこそ、懐の深い、ケース・バイ・ケースに対応できるという可能性は出てくるかとも思います。

○委員 多様性、あるいは共の世界で、例えば心配なお子さんがいた場合に、それを長く見守れるのも地域であると思います。うちの地域でも、発達障害の心配のあるお子さんがいて、小さいころからずっと見てきています。今、大分成長しましたが、それも地域で私たちが活動している中で、役割を持ってもらって、今度、こういうのがあるから、手伝ってと言うと、そのお子さんのほうからも、今度行きますと、そういう何げない中でのつながりで、行事のときに一緒に運営を手伝ってくれて、やっている様子を見ると、何年か前は心配だったけれども、随分そこのところが違ってきたとか。そのお子さんのことは、青少年委員、主任児童委員、児童館、学校、BOPの方とか、いろんな方が知っている。それで、何かのときに、あの子、随分こういうところがよくなったよねと。それでも、まだ心配なところもありますし、1人で自立をしていくには、年齢的にも、いろんな意味でも無理な状況ですから、これからも地域で見守っていかなければいけないかなと思っています。

どういう子どもさんに、どういふケースがあるのかはわからないので、それを受けとめられるのはやっぱり地域であって、課題を抱えたお子さんに、いろんな人たちが、みんな

それぞれ守秘義務を持って接していますから、絶対それがほかには行かないですし、その子の中傷する子たちもいない。

結局、そういうふう心配なお子さんがいた場合に、やっぱり地域で守ってあげないと、そこから外へ行ったときには、もっと大変な思いをきつとすと思います。ですから、そのお子さんが本当に社会的にも自立していけるようになったらいいなと思いつつ、とって、やっぱり御家庭があって、親御さんもいらっしゃるわけですから、そこまで踏み込んだ状態もできない。親御さんも知ってはいますけれども、その方の場合は、親御さんが社会的に孤立するという方ではないですけれども、親御さんに言っていったところで、やっぱりなかなか……。であれば、それも含めて、みんな承知の上で見守っていく。

ですから、距離感を持ちつつ、役割によっては、もっと立ち入ってもいい役割の人もいると思いますから、そういう人には、それはお任せするけれども、地域として、そういうお子さんがいて、随分違って来たねとかと見守っていくつながり。これは長く、そして、そのお子さんからも、道で会えば、声をかけてくれるし、何かあったら挨拶もするし、そうやってこっちからもアプローチをするけれども、向こうからもアプローチしてくれる。そういう関係で、今はとてもいいかなと思っています。ですので、この状態で、さらにそのお子さんがいろんな経験を積んだ中で、成長していってくれたらいいなと見守っているところです。やっぱり居場所、あるいはつながりという部分は、ふだんの何げないというのが大事なのかなと。

子ども食堂などは、先ほどお話も出ていまして、2000カ所で、いろんな形でやっている。これは手段としては別に悪いことではないと思いますので、続けていくのはいいなと思いますけれども、あくまでも手段ではあるかなという。でも、いいことではあると思います。いわゆる子ども食堂を始めた方々が思っている、本当に必要な人に届いているかどうかというのは、まだまだわからない状況ではありますけれども、続けていることによって届くかもしれないと考えると、手探りだけでも、続けていかなければいけないことと、それから、本当に直接的に対処していかなければいけないことがあるのかなと。

行政でもいろんなことをやってくださっているのはありますけれども、どこまでつながっているかというのがありましたよね。そここのところは、橋渡しをするのもやっぱり地域の人間かもしれないなと思います。せっかくいい行政の試みがあっても、それが生きないのであれば、もったいないことですし、行政の力も地域の力も大事ということで、さらに発展、進展していかなければいけないかなと思っています。

○議長 ふだんからの居場所とか、つながりですね。これは、前期でも、児童館だけでは、どうしても来られない子たちもいるし、児童館のキャパシティの限界もあるだろうという話があって、もっと日常的に、気兼ねなく、ふらっと立ち寄れるぐらいの関係が取り結べる場がたくさんあったらいいよねということは、よく意見としては出ていました。あと、意外と児童館に来ている子は、友達も多くて、塾にも行っていて、勉強もできてという子のほうが、アンケートをとってみたら、来ているという傾向が出たという話もありました。もう少しふだんからの敷居の低い居場所とがつながりというところも、1つ課題としては出ていると思います。

○委員 前期、子どもの貧困に対しての問題を明らかにして、それを具体的な施策に反映するという方向性でテーマを持ってくるというのは、非常にいい。前期、これで終わってしまうのもあれだなと感じながらいましたので、そういう方向性はとてもいいことだなと思っております。ただ、その中で、共と公というような形でやっていて、共の部分重視していかなければいけないし、もっと膨らませていかなければいけないというのはあったけれども、それは非常に難しいなというのも、前期、やりながら非常に感じたところです。

とはいっても、社会教育委員としては、公の部分で何か施策をとということでやっていかなければいけないけれども、どうしても共を膨らませるには、何かをやってあげるというような形だと膨らまないなと感じていますので、共のほうが膨らむためには何が必要なのか、必要なものを捉えられるような、やってあげるのではなくて、それを吸い出させるような施策として、あるいは、明らかにするという施策を考えていくのがいいのではないかと考えております。

○議長 前回から今日にかけて、皆さんの御意見を伺う中では、地域を中心とした共の世界を大事にしていこうというところでは、ほぼ共通して、おっしゃっているのではないかと思います。

今、委員から、今後の具体的な方向性についての御提言をいただけたと思いますけれども、確かに共の世界は割と自発的、ボランタリーな世界です。それをさせるというのは非常に矛盾したことになるわけで、前期に「前向きに生きていくための環境づくりへ」とタイトルづけてしているのも、それがどうしたら膨らんでいくのか、生まれやすくなるのかというような、一見すると、アプローチとしては間接的かもしれませんが、そんなニュアンスを前期の提言にも含ませていた部分があったかと思えます。

共の世界はどうすれば膨らんでいくだろうかというところをテーマにということについ

ては、皆さんの御意見としてはいかがでしょうか。

○委員 参考資料2の「一番身近な行政として、地域の力を引き出し、地域の活動や資源を対策につなげていくためのコーディネートを積極的に担うことが必要である」。この文章はとてもうまいなと思っていた。ただ、行政が出てくると、必ずお金がつきまってくる。つまり、予算とか、その辺はどうなのかというのが非常に複雑ですよ。お金がつくと、共のほうは元気が出ますが、お金の頼ると非常に曇ってしまいますよね。予算がなくなると潰れてしまうとか、そういうがあるので、このコーディネート役とか対策にお金を伴うのかどうかというのは、非常に大きなポイントだと思います。でも、何かをやるためにはお金が必要です。子ども食堂も本当はお金が欲しいけれども、これで公が余り出しゃばって、お金をつけてしまうと、逆にマイナスが出てくるという。かといって、お金をつけない、自分たちでやりなさいというと、非常に冷たいですよ。この辺が非常に難しいかなと思いますが、ただ、私としては、これでいいのではないかと思います。

ただ、共の場合には、要は、寄ってたかってやりなさいということです。寄ってたかるといことは、地域の人たちのそれだけのいろんな意見があります。寄ってたかての意見をどうまとめていくかというのは、施策とか、イニシアチブをとるコーディネートの必要かなと思うし、あくまでも1つの大きな目標、子どもたちのためという目標があれば、寄ってたかての意見も何とか収束できますが、そのこととお金のことが非常に矛盾してくるかなと思って、ジレンマです。

○議長 恐らく、個別具体的に詰めていこうとすると、そういったことも課題として出てくるかもしれません。行政として、地域の力を引き出すようなコーディネート役、引き出していけるような仕組みというか、そこにはコーディネートもあるでしょうけれども。

割と社会教育行政は、サークル活動をどんどん支援して、例えば講座を打って、そこに集まった人たちが趣味サークルをつくって、それが自立していくことをバックアップするみたいなことが仕事ですから、直接活動団体にお金を充てるというアプローチもありますけれども、活動が生み出されるようなサポートをするというアプローチも一方ではありませんので、そのあたりなどは、研究したりしながら、どんなことが可能かということは、アイデアを膨らませられるかもしれません。

今、共の世界の力というものをどうやって引き出せるか、あるいは、どうすると膨らんでいこうかというような御提言がありました。その辺のところ、ほかに何かございましたら。

○委員 膨らむという意味では、楽しい、人が集まっている、そこに行くとか何かいいことがありそうな感じがするとか。子ども食堂ばかり言って申しわけないですが、オープンにやっていると、そこに子どもがいて、それにかかわる学生がいてというと、何をやっているのとみんな興味があって、それで広がっていく。対象の人ではないけれども、興味を持ってくれると、口づてに必要なところに届いていくようなことがあるので、にぎわいというのも大事なかなと思います。悲壮感を持ってやっているとか、社会のためにというよりは、楽しい、わくわくする、行きたいなと思う、ある意味仕掛けだったり、今の時代に合ったようなこととか、新しい情報が提供されているとか、世田谷独自の、地域独自の—ものがあったりするといいかなど。

今、中学生や高校生が来ないのは、子ども食堂が彼らに楽しいを提供できていないのかなど。おなががすいているというところでは来るかもしれないけれどもというようなことがあって……。

○議長 そうしますと、そういった仕掛けというか、場のありようというのも含めて、おおよその方向性としては、今のよう、わくわく、楽しく、自発的に何かが生み出されていくような方向が生まれるような施策、方法論をみんなで議論するというので、皆さん、御異存はないということよろしいでしょうか。

共の世界をいかにして膨らませていくのか、地域の力を引き出していくためのサポートを行政がどういうふうな公助としてできるのかという方向性を仮とさせていただいて、それを次回の会議でもう1度もんで最終決定したい。その間に、皆さんにも、そういう方向性でいかどうかということを考えていただければいいかと思いますが、よろしいですか。

○委員 確認ですが、3つの施策の中で、「『共の世界』を豊かにする」というのは、今日の議論の中で、いわゆる「膨らませる」と。「プラットフォームをつくる」、「ネットワークをつくる」というのは、具体的に「つくる」となっていますが、これは1つの方向性が出たということで、この文言「つくる」ということでいいですね。

○議長 「『共の世界』を豊かにする」、「プラットフォームをつくる」、「第三の大人のネットワークをつくる」というのは、前期のビジョンですよね。

○委員 今後の方向性として、どういうふうにしてつくるかとか、方法論の議論がこれからだという理解でいいですか。

○議長 もし、事務局提案でいいということであれば、そういったことについての具体的な議論になっていきます。ただ、その議論をする際に、大事にするべき視点は、今いただ

いた自立的な力ですよね。それぞれの持っている力が発揮できるようという視点は大事になってくるかと思われまますので、そこを大事にしながら、「第三の大人のネットワークをつくる」こととか、「プラットフォームをつくる」。

○委員 逆走してはいけないと思いますので、ここから先へ進むという理解でいいですよ。例えばプラットフォームは要らないだとか、そういう議論にはならないということでもいいですよ。

○議長 極論を言えば、違った議論の方向性があるのではないかとということがあれば、それも含めて確認したいところです。

○委員 私は逆走しないほうが良いと思っていますので、議論は進めたほうが良いと思います。

○議長 前回、子どもの貧困を扱うことは、ある種、特定のケースに対してのことではないかという御指摘もいただきました。つまり、これは全ての子どもたちに向けたものになる必要があるのではないかという御意見もありましたので、皆さんにも考えていただく必要があるのかなと思っています。

ただ、ここ6年間、この社会教育委員の会議で議論してきて、わかってきたことは、どの子も関係性の貧困に陥るリスクを抱えた社会だという認識です。つまり、中高校生が地域とどうつながり、参画できるかというテーマを前々期にやったのですけれども、そもそも受け入れる地域がないではないか、大人のネットワークがないではないかという認識にたどり着きました。もちろん世田谷区の中では、盛んにやっている地域もあるけれども、それがここ何十年の間、厳しい状況になった、継続性を生み出すのは一苦労ということがありまして、もしかしたら大人のほうがそもそも関係性の貧困になっているのではないかという認識です。そう考えると、特定の、ある状況に陥った子どもたちのためだけの議論というよりも、これを施策化するということは、下支えを豊かにしていく、あらゆる子どもたちの育ちを豊かにしていくという議論にも結びつくものとして、前期の報告書は出させていただいたということを改めて補足させていただきたいと思います。

その上で、逆戻りするのではなくて、それに基づいて、やったほうが良いのではないかという御意見。その辺のところは、皆さん、よろしいでしょうか。そこの了承をいただけるかどうかは確認しておきたいと思います。前期の報告書までの到達点は踏まえた上で、深めていくというのを前提として進めていくということでもよろしいでしょうか。

(異議なし)

○議長 ありがとうございます。では、その上で、公助の部分では何ができるかというところを少しこちらで引き取らせていただいて、資料にして、次回、皆さんに御意見をいただいて、固めていくという形にさせていただこうと思います。

今後のスケジュールについて会議資料3をごらんください。第27期は第2回にテーマ設定と活動内容の検討をやりました。その次に、前回会議の論点整理、そして、事例研究をして、事例研究から見えてきた課題抽出をし、後期の活動の方向性について考え、整理して、具体的な方策を考え、活動報告書づくりを次の年度でやっていった。第27期は全10回をそんな流れでやっておりました。

今期を今後どうするかということについて、次回に御検討いただこうと思います。ただ、第10回、再来年の2月には活動報告書をまとめるというのがあります。それをまとめるためには、活動報告書案の検討を2回ぐらいしなければいけない。そうすると、第7回、来年の7月ぐらいには活動報告書の素案ができ上がっていてみんなでたたいて、第7回から第10回はフィックスです。予定としては動かせないということで、次回の会議では、第4回、第5回、第6回の3回をどういうふうにするか、調査研究をどういうふうにしていくかというあたりのアイデア出しになるかと思います。実際の施策や方策についての意見交換になりますので、前期のような事例検討とは、方法は違うかもしれませんが違った中身を考えなければいけないかもしれません。そのあたりについては、こちらのほうでも何か参考になるような資料等を用意できればと思いますので、よろしくお願いします。

では、今のスケジュール案についてはよろしいでしょうか。

(異議なし)

○議長 ありがとうございます。では、(2)その他に移りますが、事務局から、まずは事業報告ということで、よろしく申し上げます。

○事務局 第41回ふるさと区民まつりが8月4日、5日に実施されました。今回、全体としては、昨年3万9000人のところ、4万5000人の来場者があったということで、うち、子ども部会ですが、昨年とほぼ同様ぐらい、おいでいただいたということになっておりまして、青少年委員及び青少年委員OB会の方を初め、7団体の方に御協力いただいて、滞りなく実施できましたという御報告でございます。

2点目、第21回アドベンチャー in 多摩川いかだ下り大会は、社会教育委員の皆様には、約半数の方においでいただくことになっております。小学校が49艇、中学校が5艇、出艇いたします。区立小中学校はもとより、児童館、私立小学校、特別支援学級からもおいで

いただけますので、活動内容等を見ていただければと思います。

○議長 その他、皆様のほうから、何か情報提供とかはよろしいでしょうか。

(なし)

○議長 では、次回の日程の調整をさせてください。次回は10月ということで事務局から出ています。

(日程調整)

○議長 第1候補としては10月10日ということで、予定に入れていただければと思います。正式に決まりましたら、事務局から連絡していただきます。

今日用意されております議事については以上になります。

これにて第2回定例会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。